

^ 13
3162
1
- 70



~ 13
3162
1-29

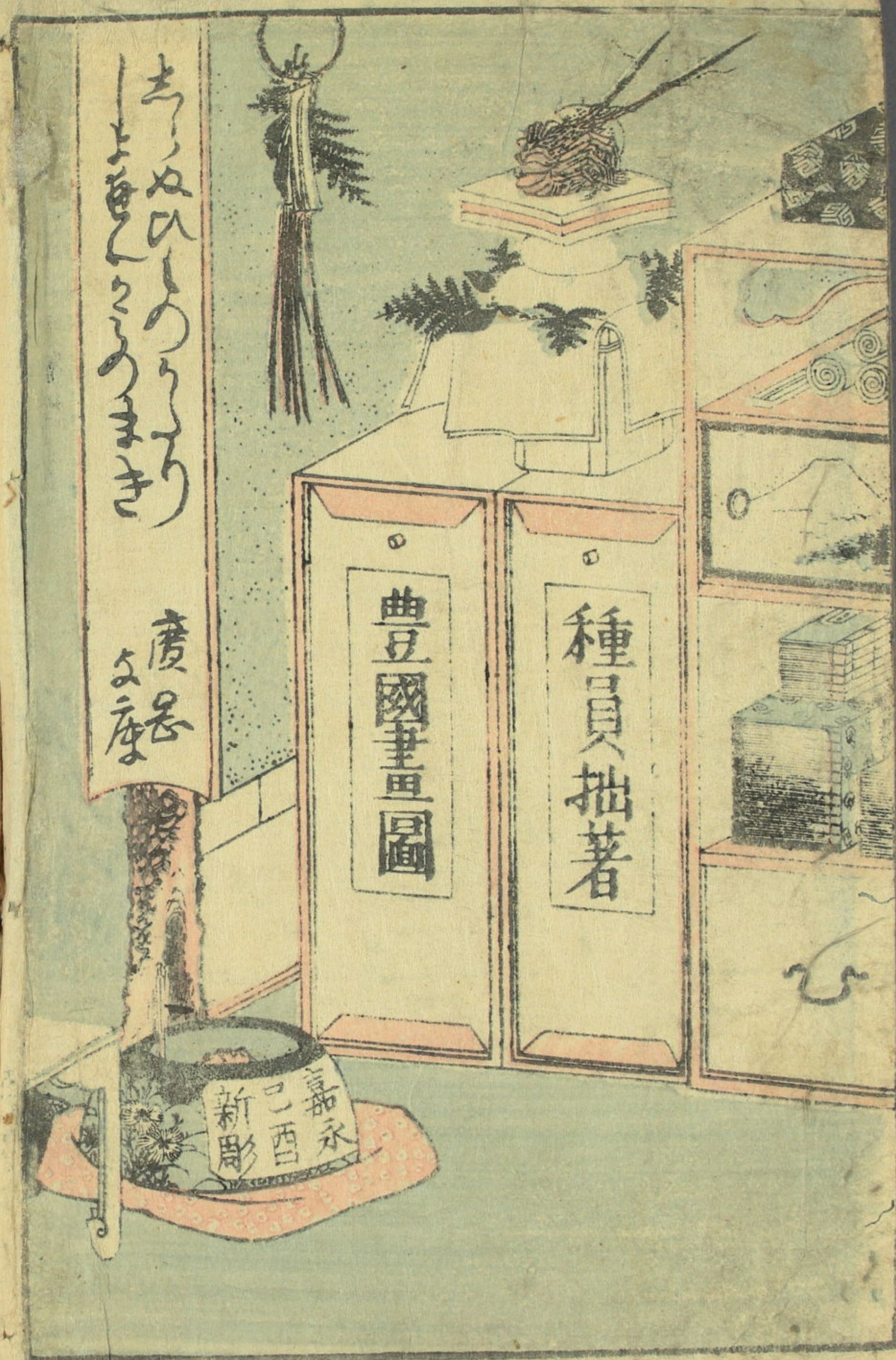
初原ん
二原ん

のめい
のり



あしぬひのり
しよきんさのまき

廣長
な厚



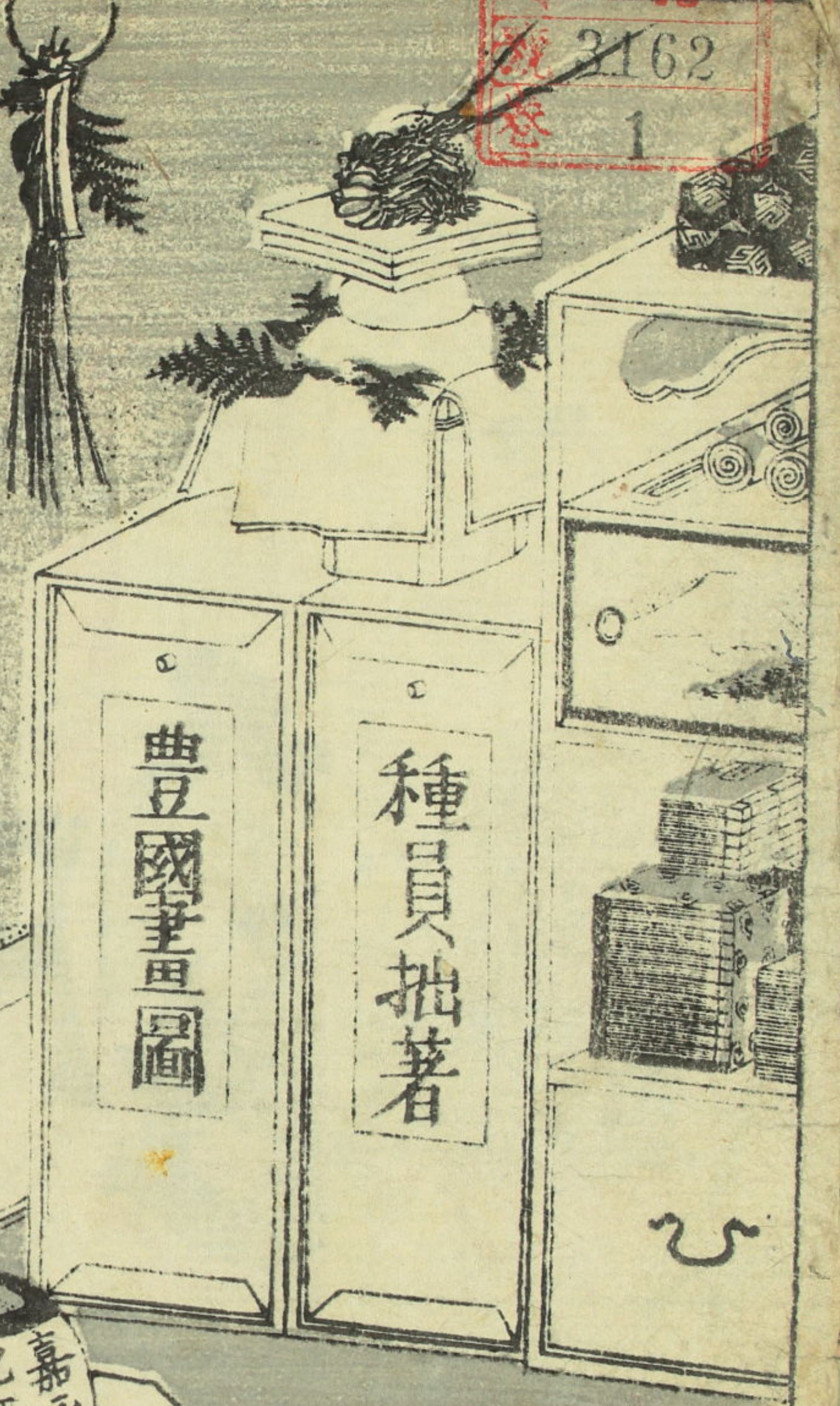
西
2162
1

去々ぬひのりり
一とあこころまき

度長
文座



嘉永
己酉
新彫



皇朝の皇氏部
物語と終て一身地

著して子孫三世と生うる富言と作るを
教誡

為其何程作も語も地獄
咄生も

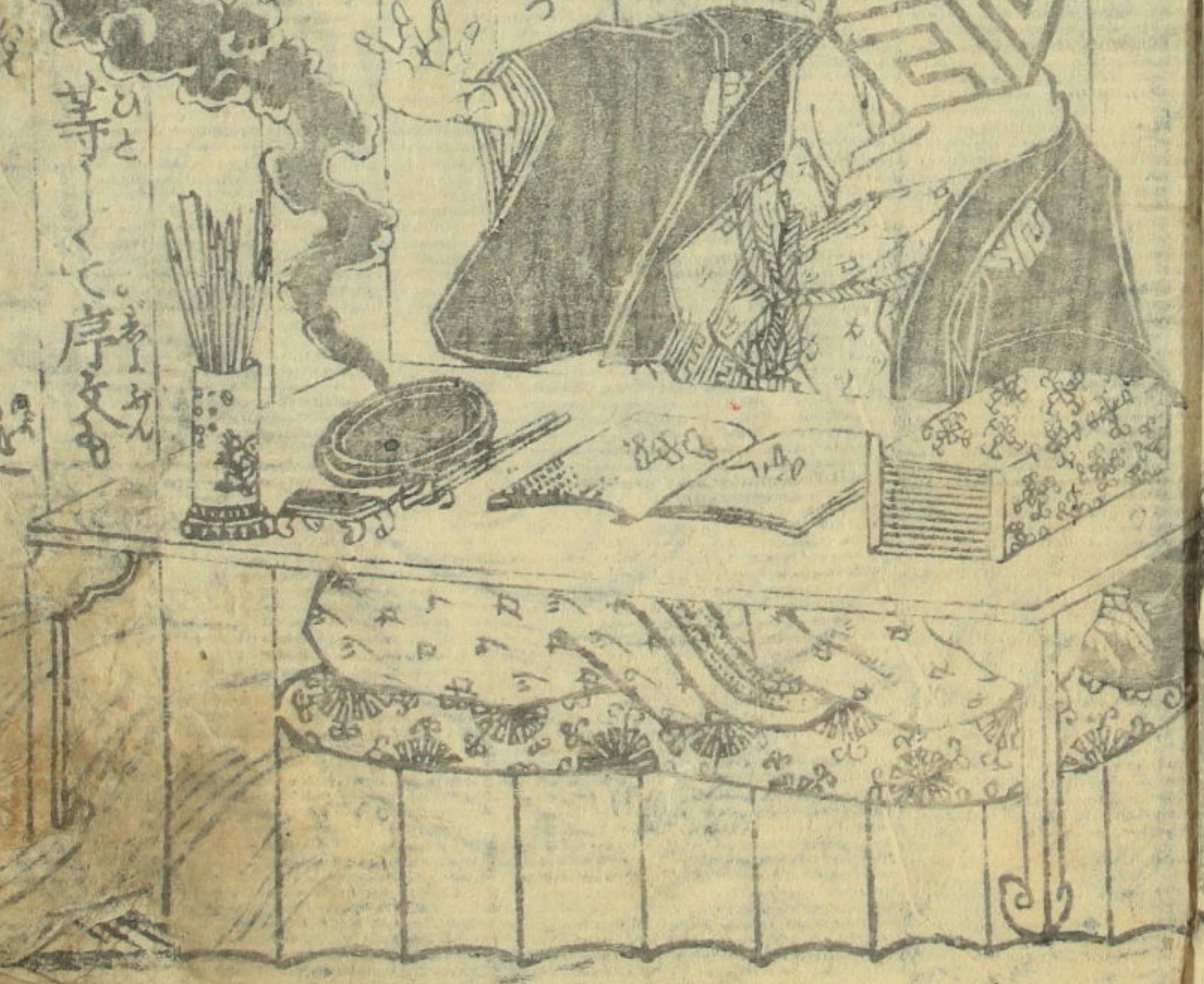
菜瓊子
除夜

岬
用卷
評判
郷音

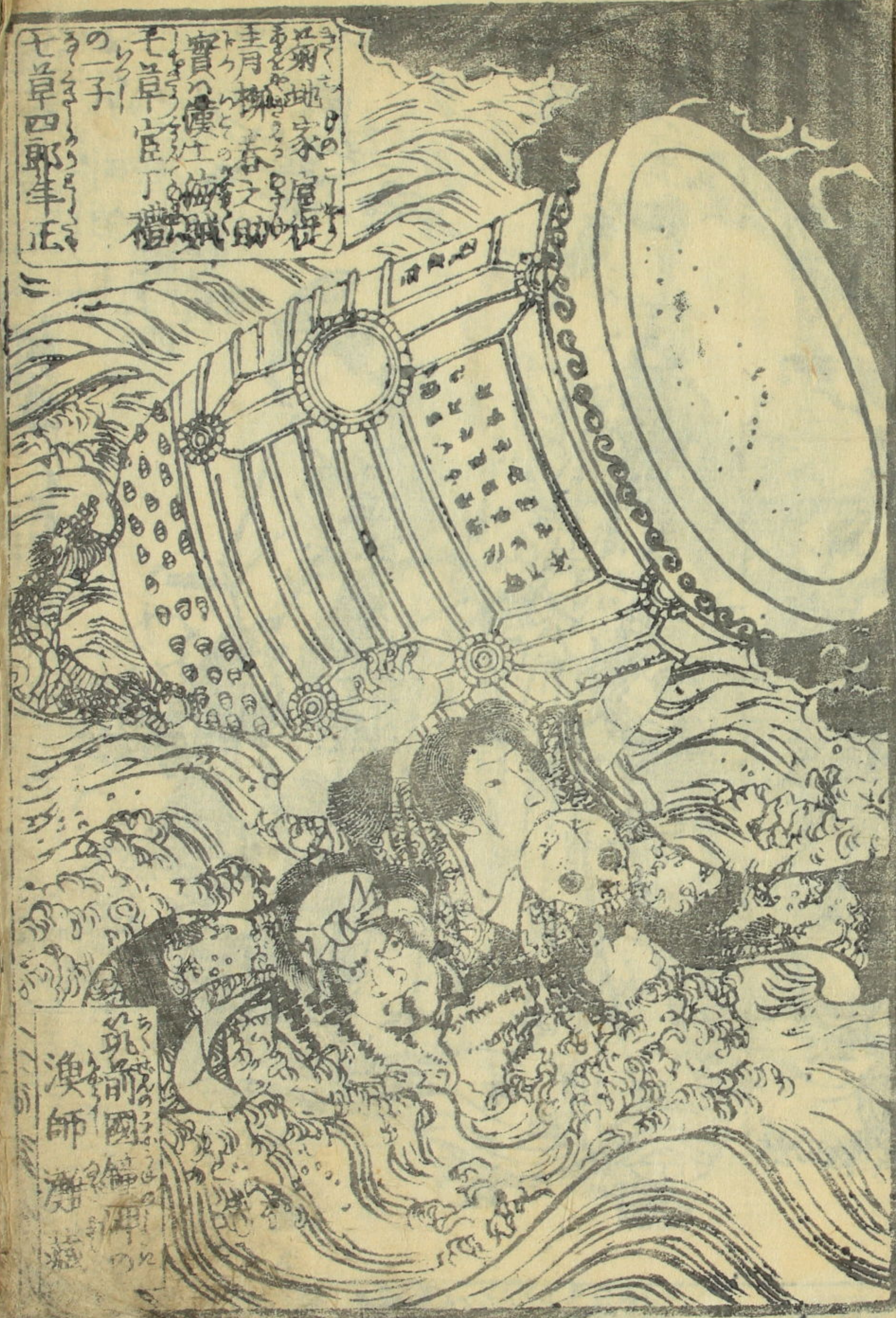
嘉永二年正月詞

嘉永二年
西歲
柳下亭

祝
序文



七章四郎年正
の二子
千草官丁
實の儀江
主月柳春之助
近衛家



前國
澳師

豊後國臼杵
城主大友入道
宗隣
若菜燦子

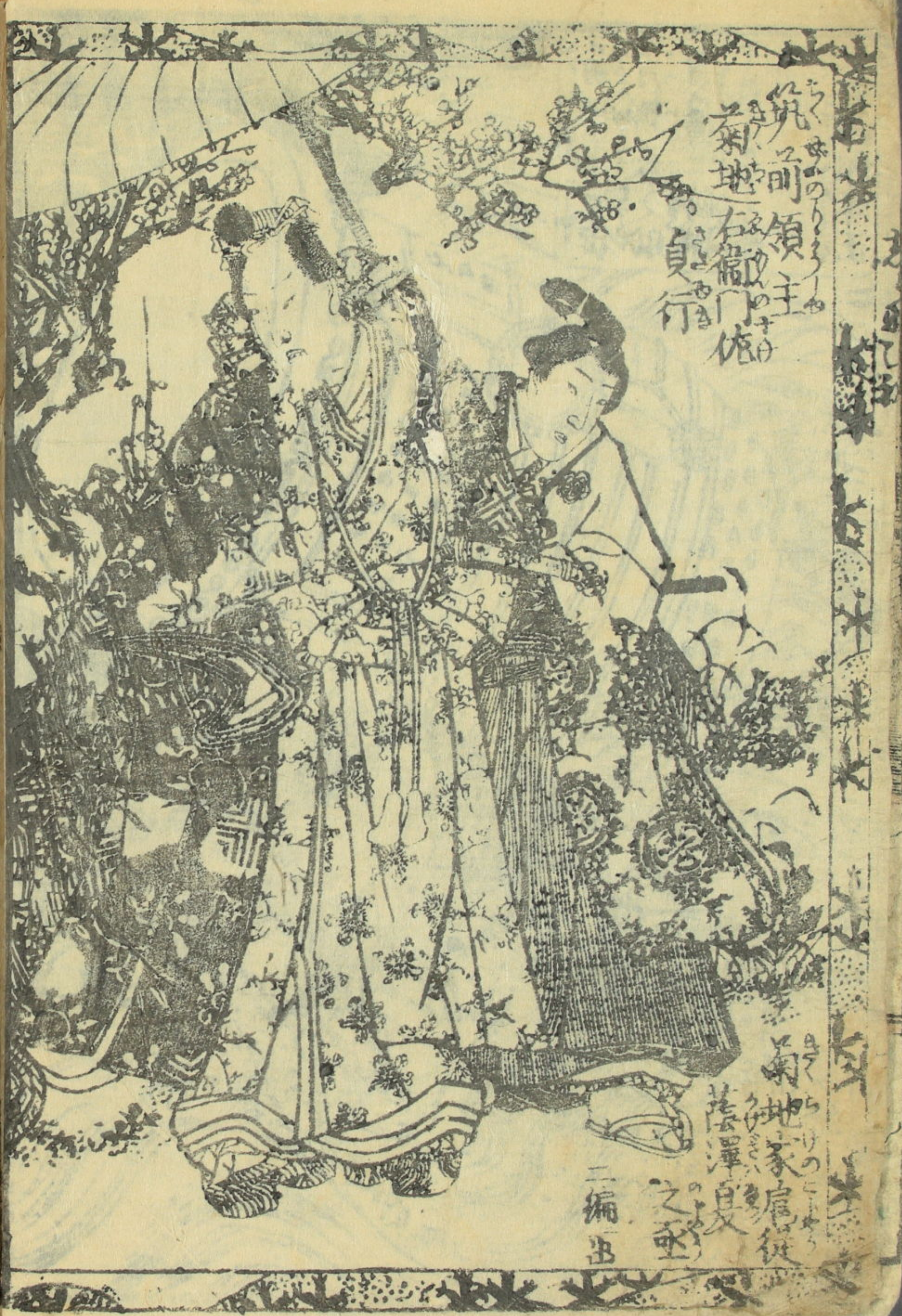




博多柳町の
傾城獨銚屋
后之自行の
於筆の方

月譜集
はらりたる
ちりたる
あはれ

同家
真中
岩根



筑前領主
菊地右衛門
貞行 依

菊地家
陰澤
之丞
二編出

是則七草四郎年正身
再出



山城國若生郎 賤女
實八太友家 女若菜姫
再出

是則七草四郎年正身

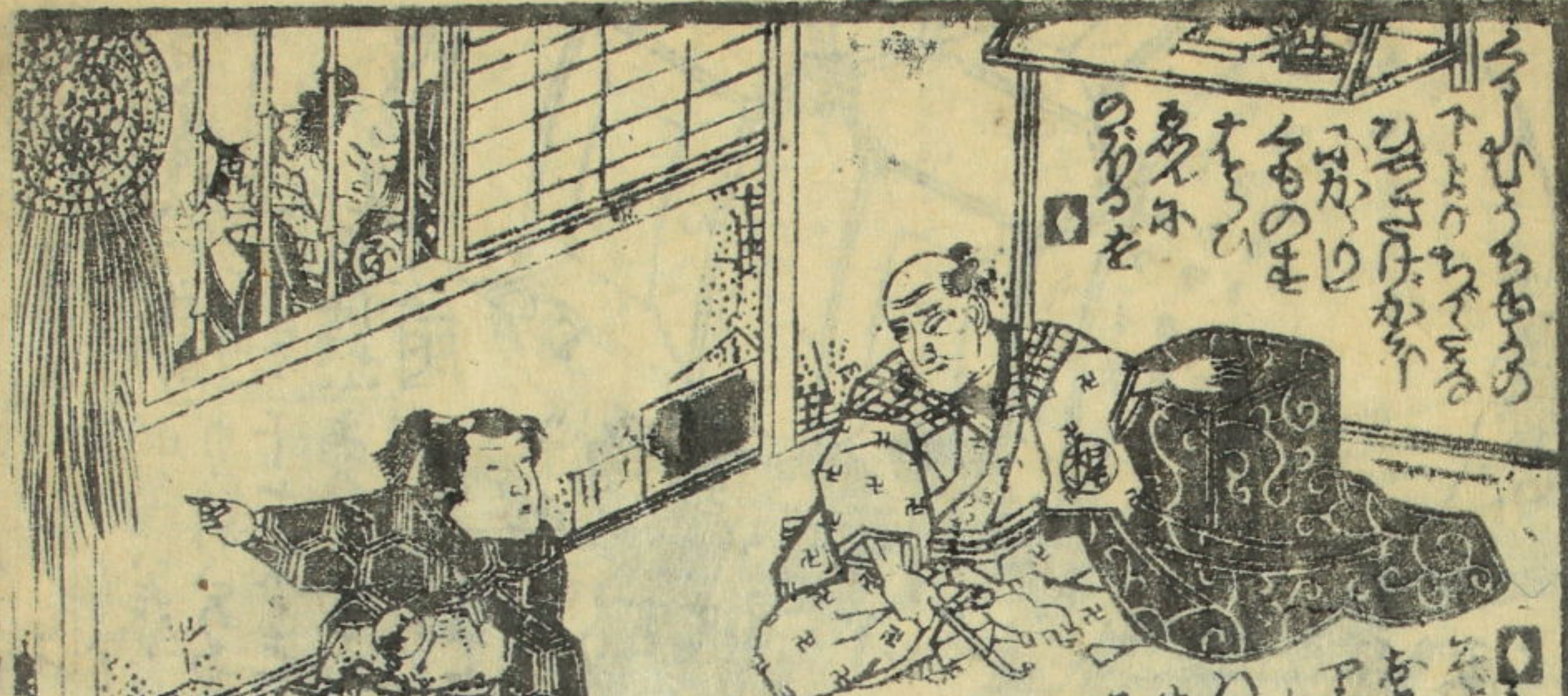


源順
鳥山秋作
二編出

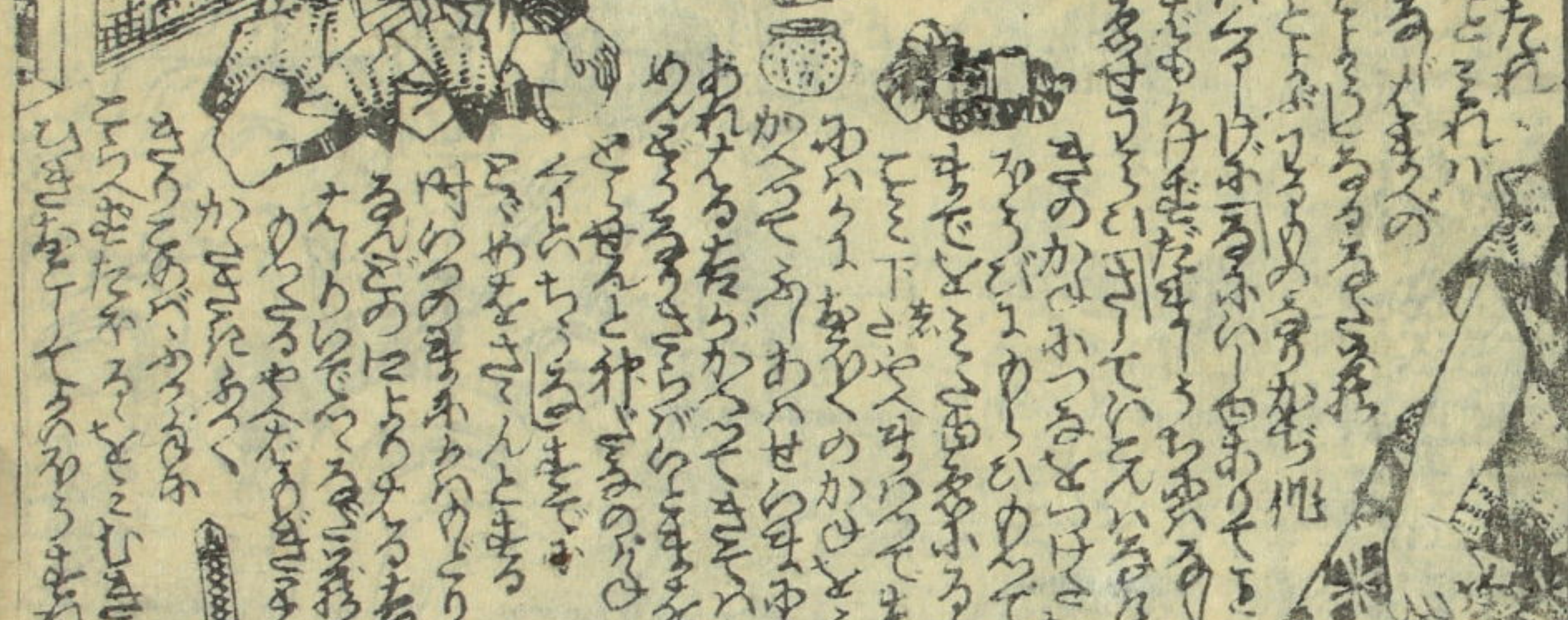
同
雲山冬治郎
二編出

源順
鳥山秋作
二編出

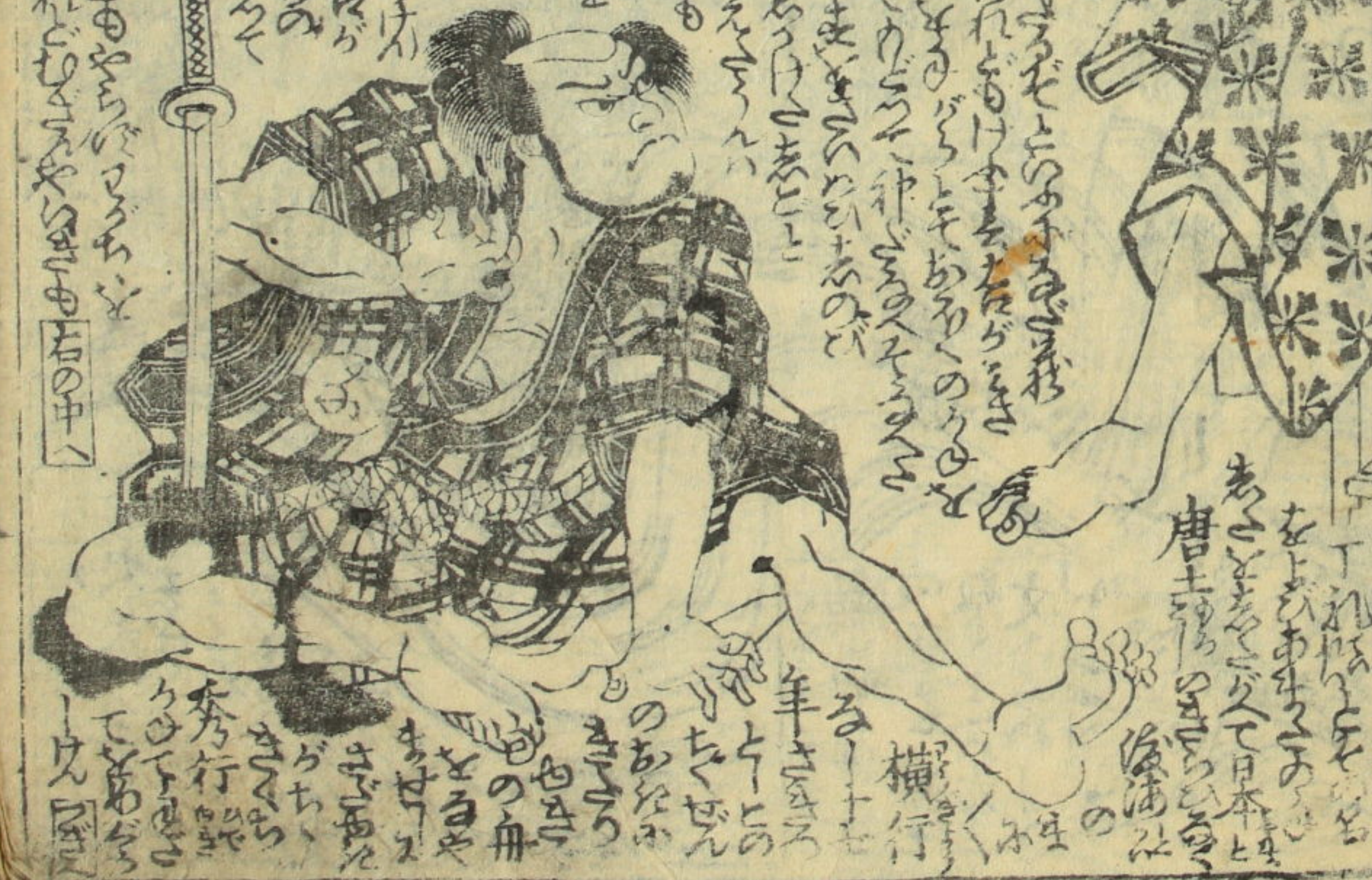




うしろのちやうど
下よりちやうど
ひさしはか
ふかひ
ものま
たし
あま
のあま

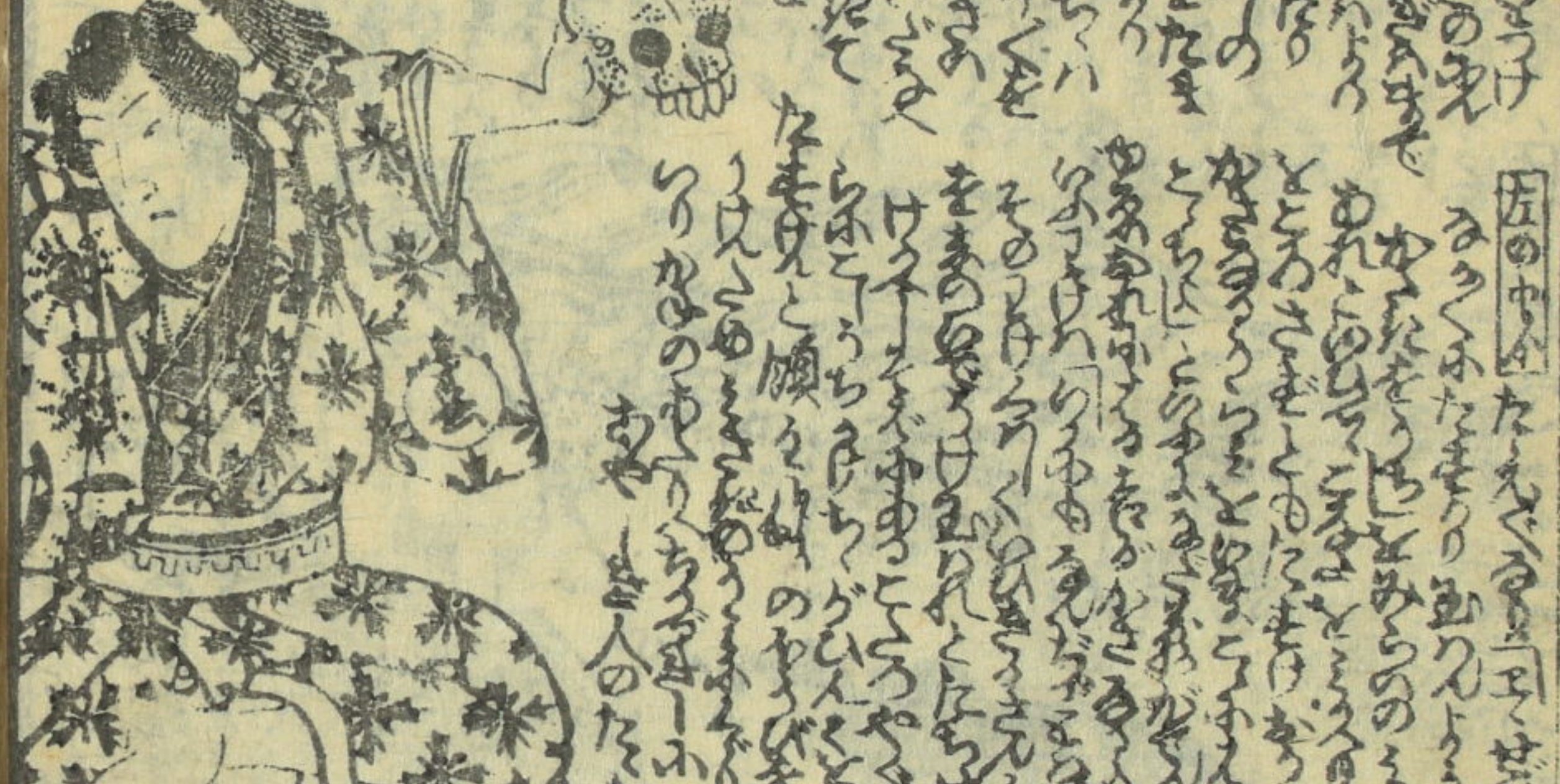


うしろのちやうど
下よりちやうど
ひさしはか
ふかひ
ものま
たし
あま
のあま



うしろのちやうど
下よりちやうど
ひさしはか
ふかひ
ものま
たし
あま
のあま

うしろのちやうど
下よりちやうど
ひさしはか
ふかひ
ものま
たし
あま
のあま



うしろのちやうど
下よりちやうど
ひさしはか
ふかひ
ものま
たし
あま
のあま

うしろのちやうど
下よりちやうど
ひさしはか
ふかひ
ものま
たし
あま
のあま

うしろのちやうど
下よりちやうど
ひさしはか
ふかひ
ものま
たし
あま
のあま

多岐の里
明子と丹
画

初編下

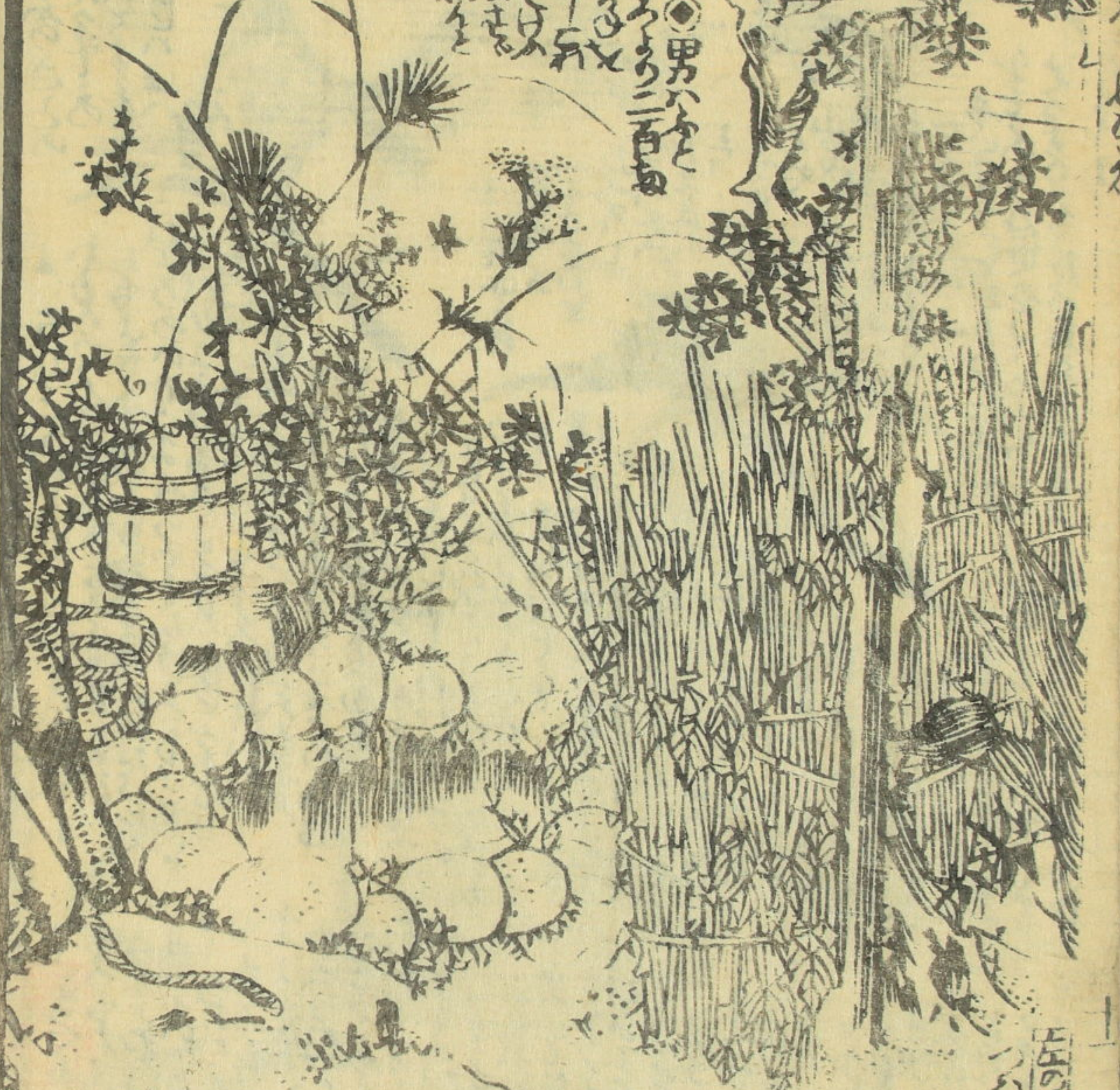


あつた十五年前の
まきりしむじが
あつた入ふやと
て肥後野のまきり
かたきまきり
後げのまきり
つまきり
かたきり
つまきり
あつた十五年前の
まきりしむじが
あつた入ふやと
て肥後野のまきり
かたきまきり
後げのまきり
つまきり
かたきり
つまきり



あつた十五年前の
まきりしむじが
あつた入ふやと
て肥後野のまきり
かたきまきり
後げのまきり
つまきり
かたきり
つまきり
あつた十五年前の
まきりしむじが
あつた入ふやと
て肥後野のまきり
かたきまきり
後げのまきり
つまきり
かたきり
つまきり

あつた十五年前の
まきりしむじが
あつた入ふやと
て肥後野のまきり
かたきまきり
後げのまきり
つまきり
かたきり
つまきり



あつた十五年前の
まきりしむじが
あつた入ふやと
て肥後野のまきり
かたきまきり
後げのまきり
つまきり
かたきり
つまきり

此番の十十
 年まへ
 ありし支
 ち昔相
 あり

此番の十十
 年まへ
 ありし支
 ち昔相
 あり

此番の十十
 年まへ
 ありし支
 ち昔相
 あり

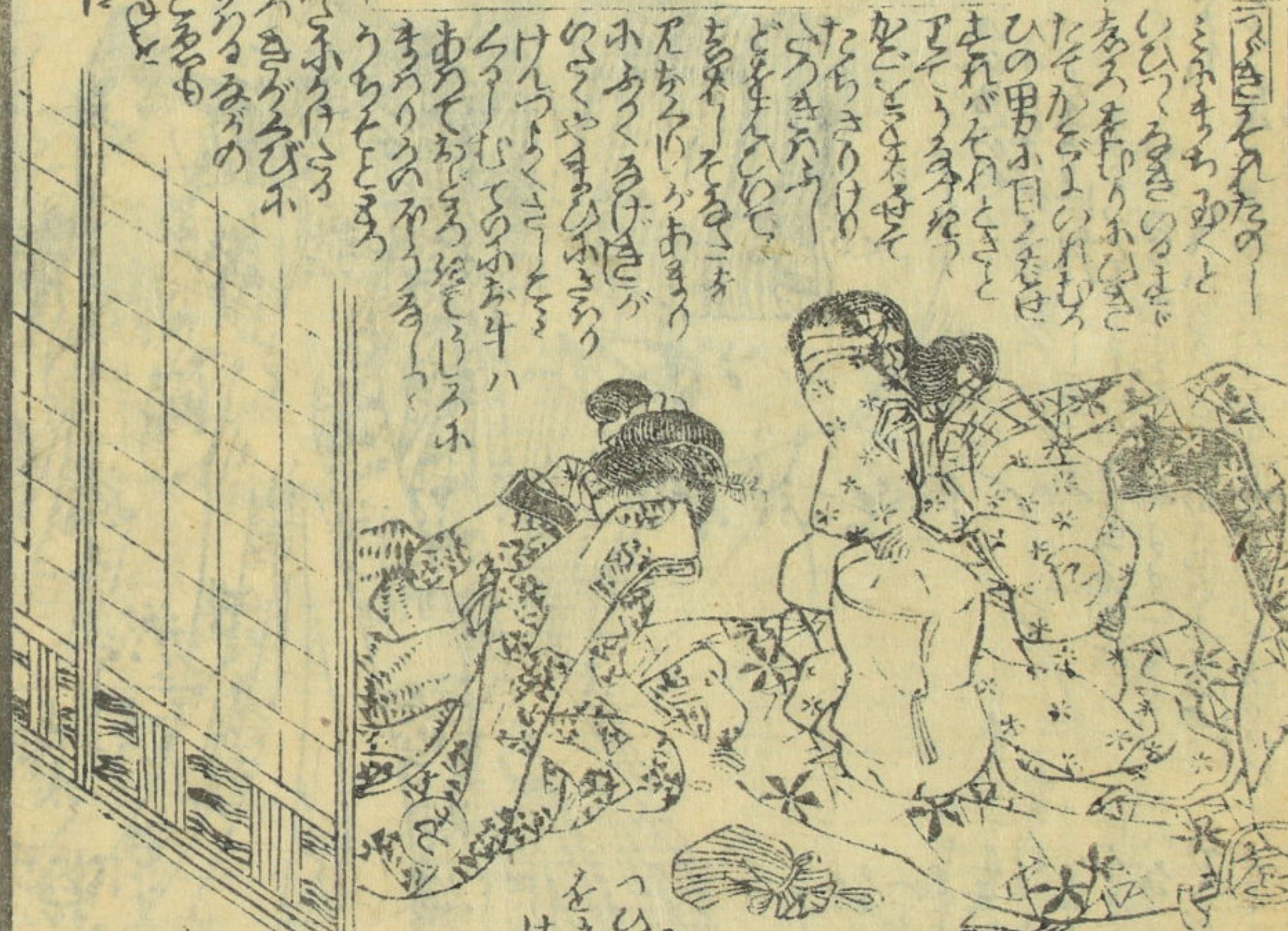


此番の十十
 年まへ
 ありし支
 ち昔相
 あり

此番の十十
 年まへ
 ありし支
 ち昔相
 あり



此番の十十
 年まへ
 ありし支
 ち昔相
 あり



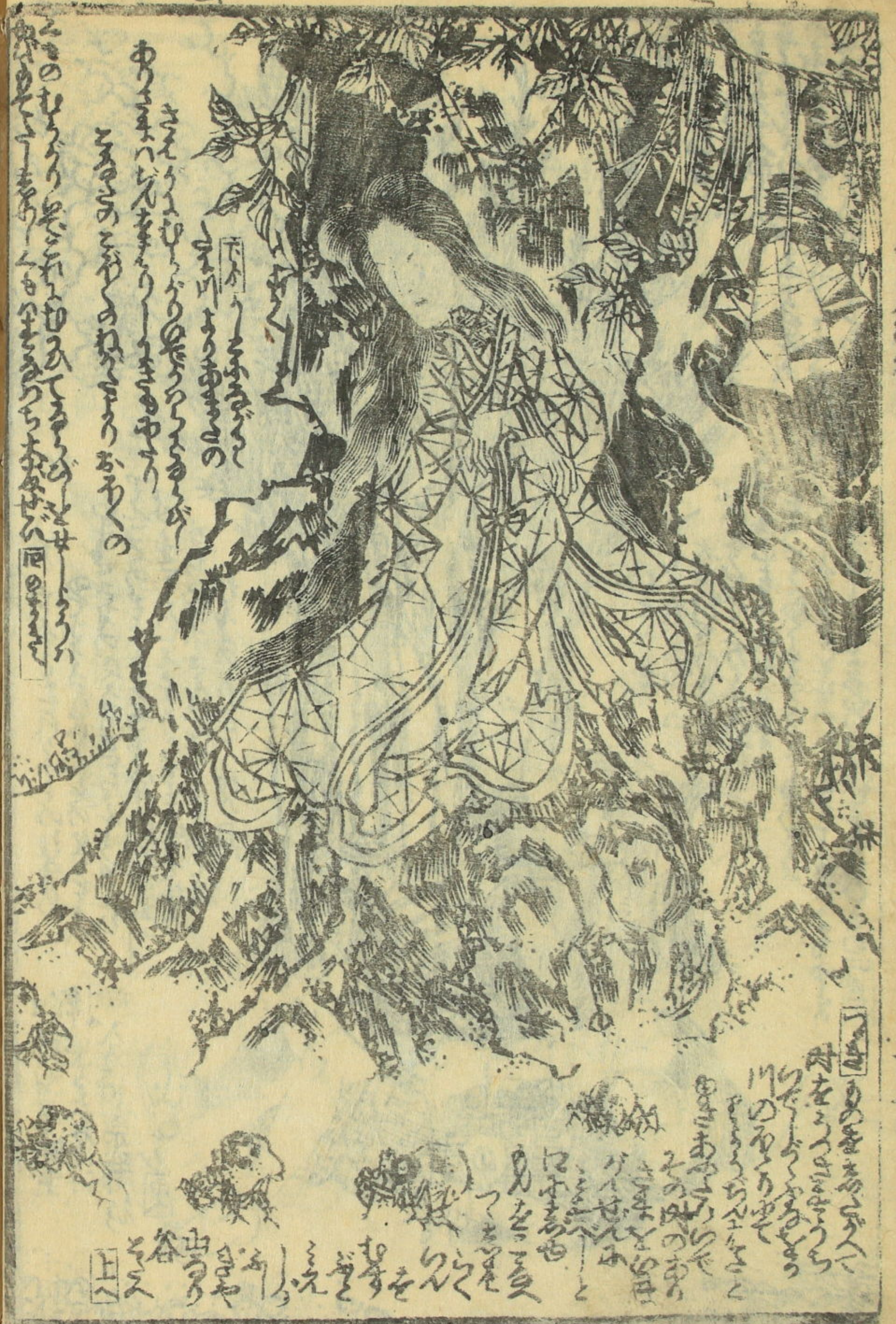
此番の十十
 年まへ
 ありし支
 ち昔相
 あり

此番の十十
 年まへ
 ありし支
 ち昔相
 あり



月夜に水鏡に照らす
 花の影をうかぶ
 女はみづのほとり
 立ちてかきおこす
 蟹の群

水鏡に照らす



月夜に水鏡に照らす
 花の影をうかぶ
 女はみづのほとり
 立ちてかきおこす
 蟹の群

月夜に水鏡に照らす
 花の影をうかぶ
 女はみづのほとり
 立ちてかきおこす
 蟹の群



春吉青柳春
之助と名成
更ゆ菊地貞
行小籠
る夏二編
ふら

志 羅 幣



再板



廣身板



白雲譚二編

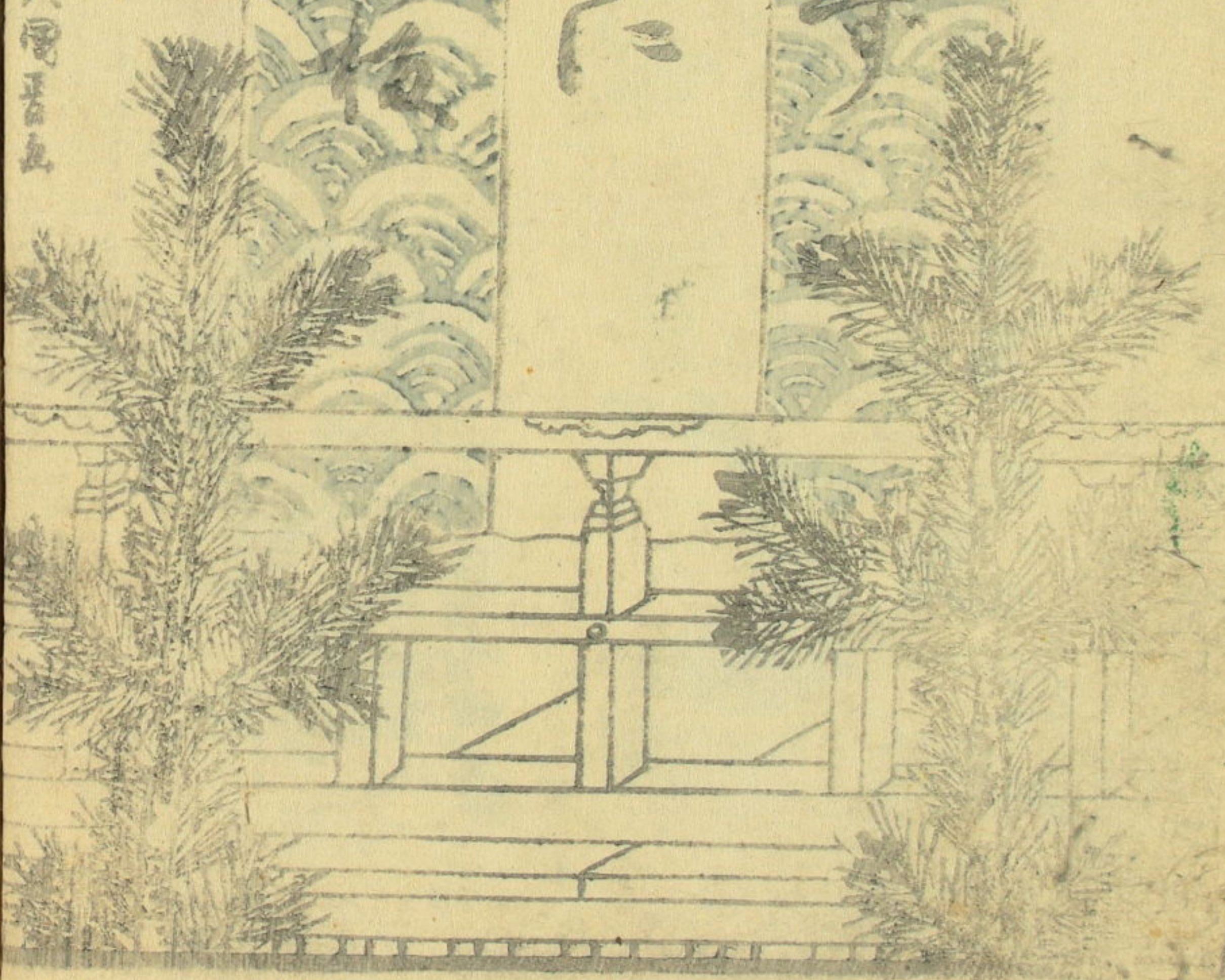
利人の心をなす

いぢやう舞やうた

又もたれまはれ

廣息女としと

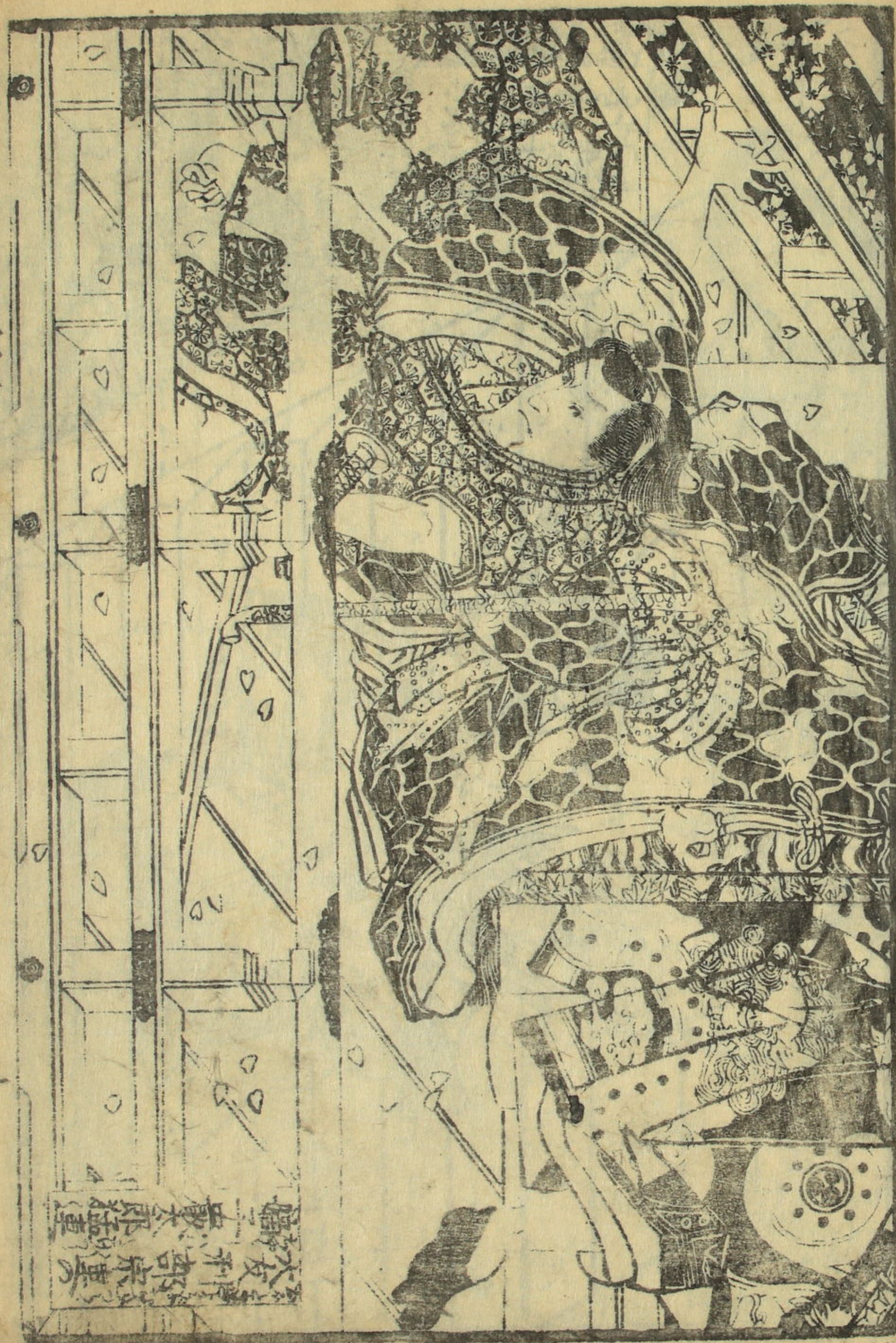
の八幡菩薩



此編二の巻小假用せし海士の謡曲は奈良御宇藤原淡海公唐土
より傳來せし面白背の名玉を讃洲志渡の海中失ひ彼所の延
不契りぬまゆ玉と海底小探せし延黄節系身身を捨て千ヨ母の浪間
潜り龍神の守護したる名珠と奪ひぬまゆ悪龍毒魚の追かふる
詮方多くて乳の下と致玉と結んで浮きを乳を思ひせ乳母が忠義
翻案して綴んとする腹稿もまろるる内々龍神の追を烈しし書房の催
促心急て胸小浪もる志渡浦に因あはし條院譚岐が意歌
あつそ海を浪まかたひてかづかづか蟹の息もつさあまりのこと知れり
嗚呼有磯海の深くもあはれ浅き才のて作りのま物語の案をえり
きの白水郎の息よりもの苦き裨官の腹裏かき

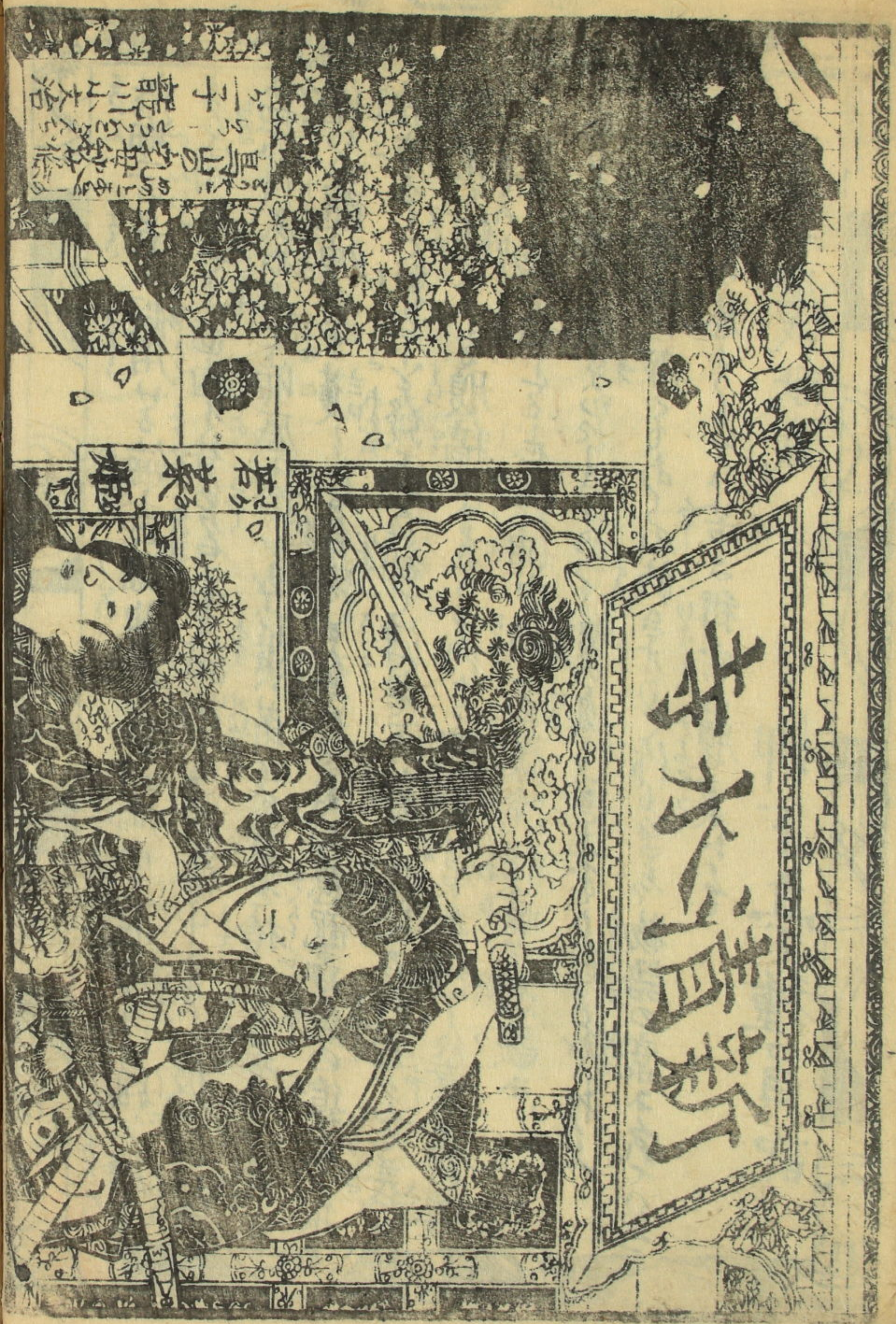
嘉永庚戌献歳

柳下亭種員記



11

大友宗重
重太郎宗重

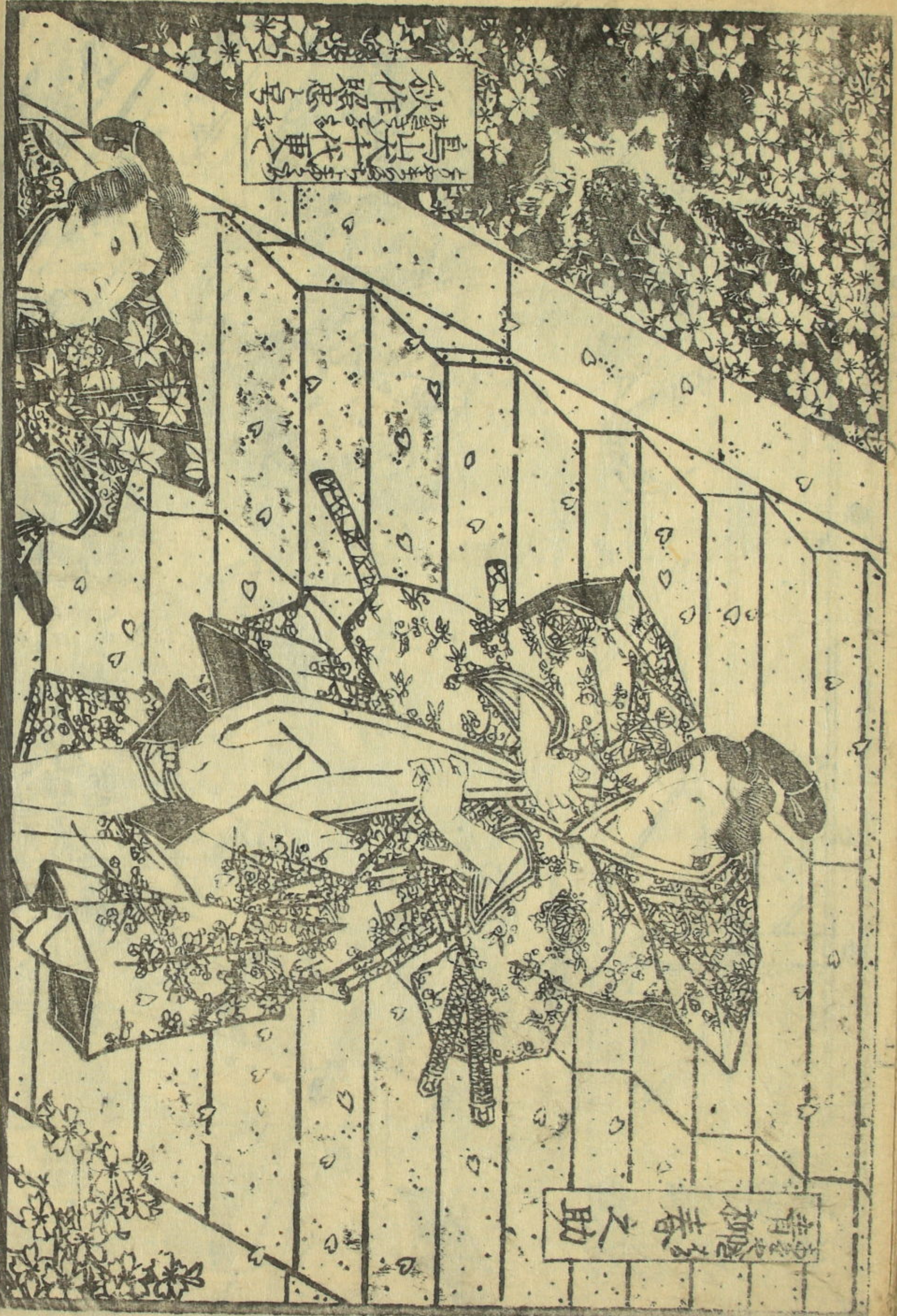
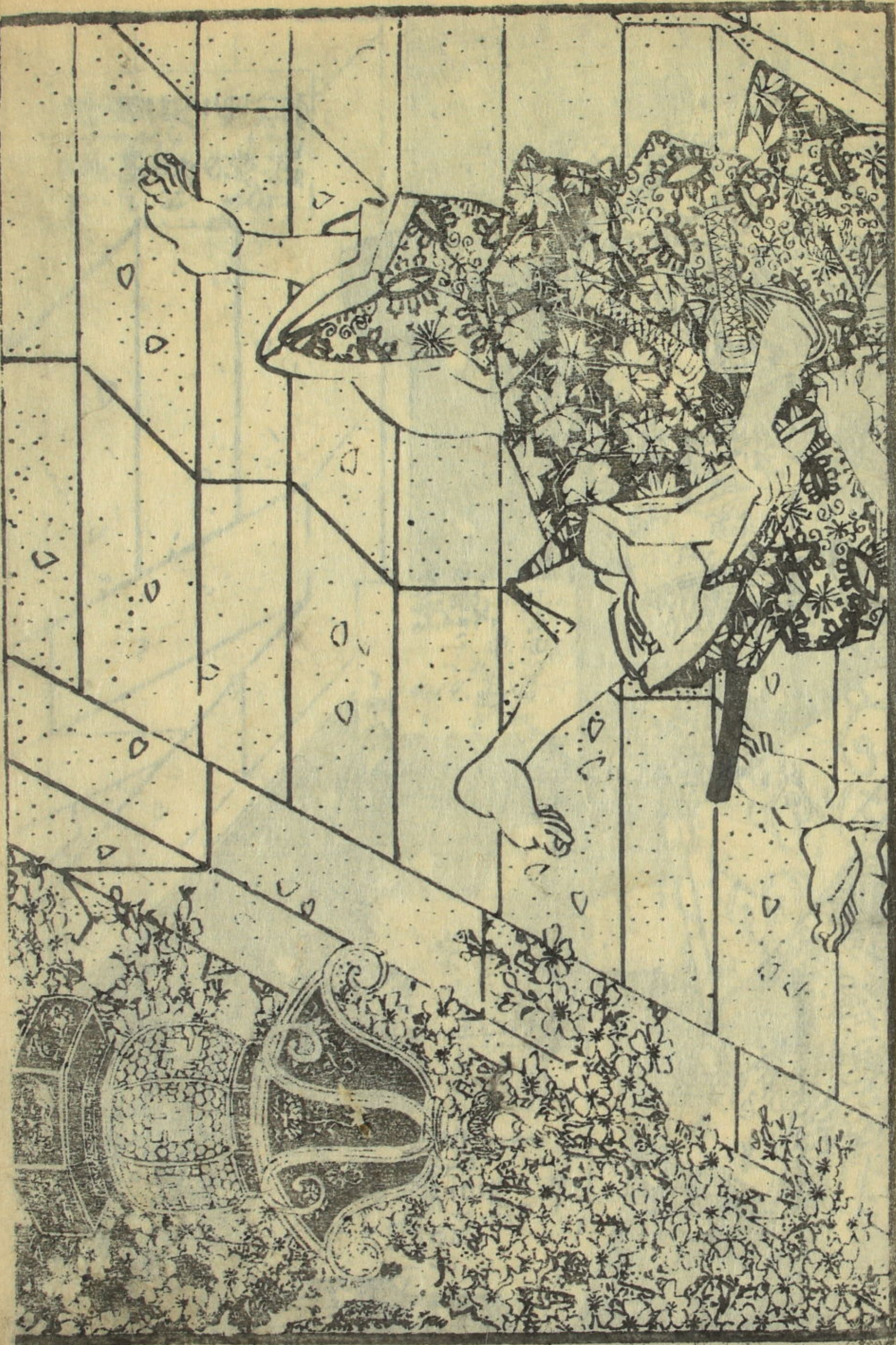


11

真山の母
子 龍川大浴

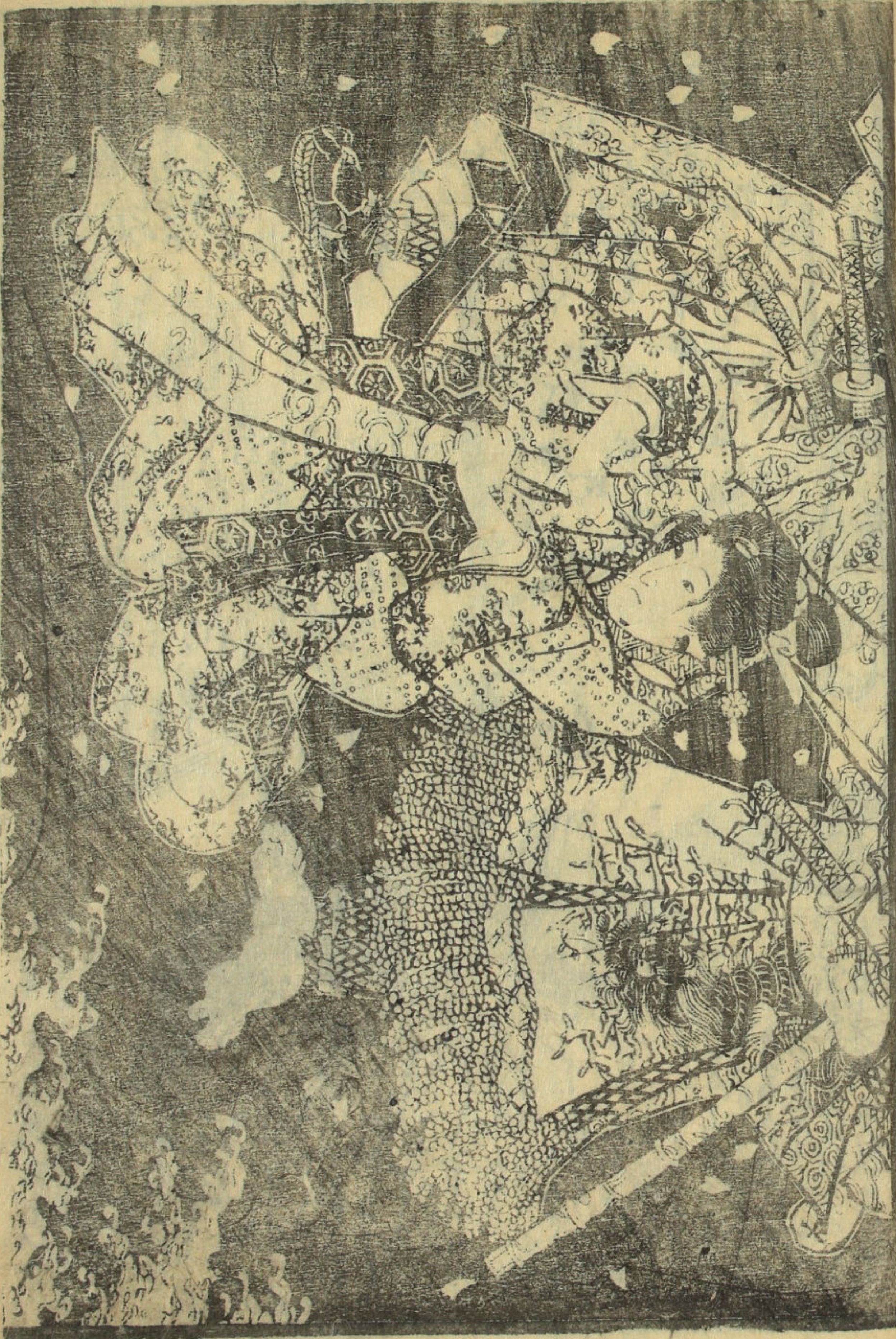
若菜姫

新清寺

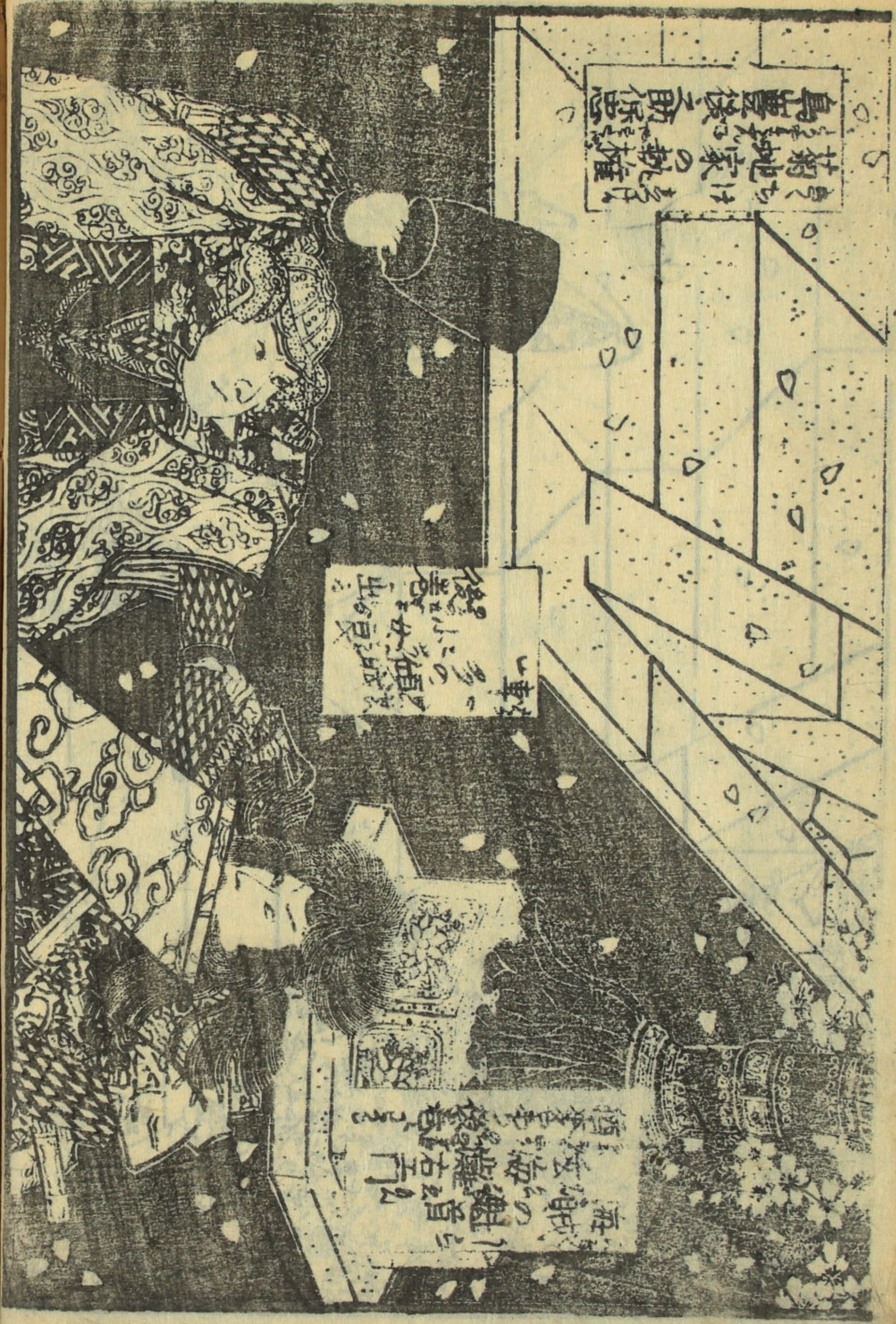


鳥山千代更
作照忠之号

青柳春之助



鳥居



鳥居
菊地家の執権
鳥居後之助保

車
多の
後小の
巻の
出良

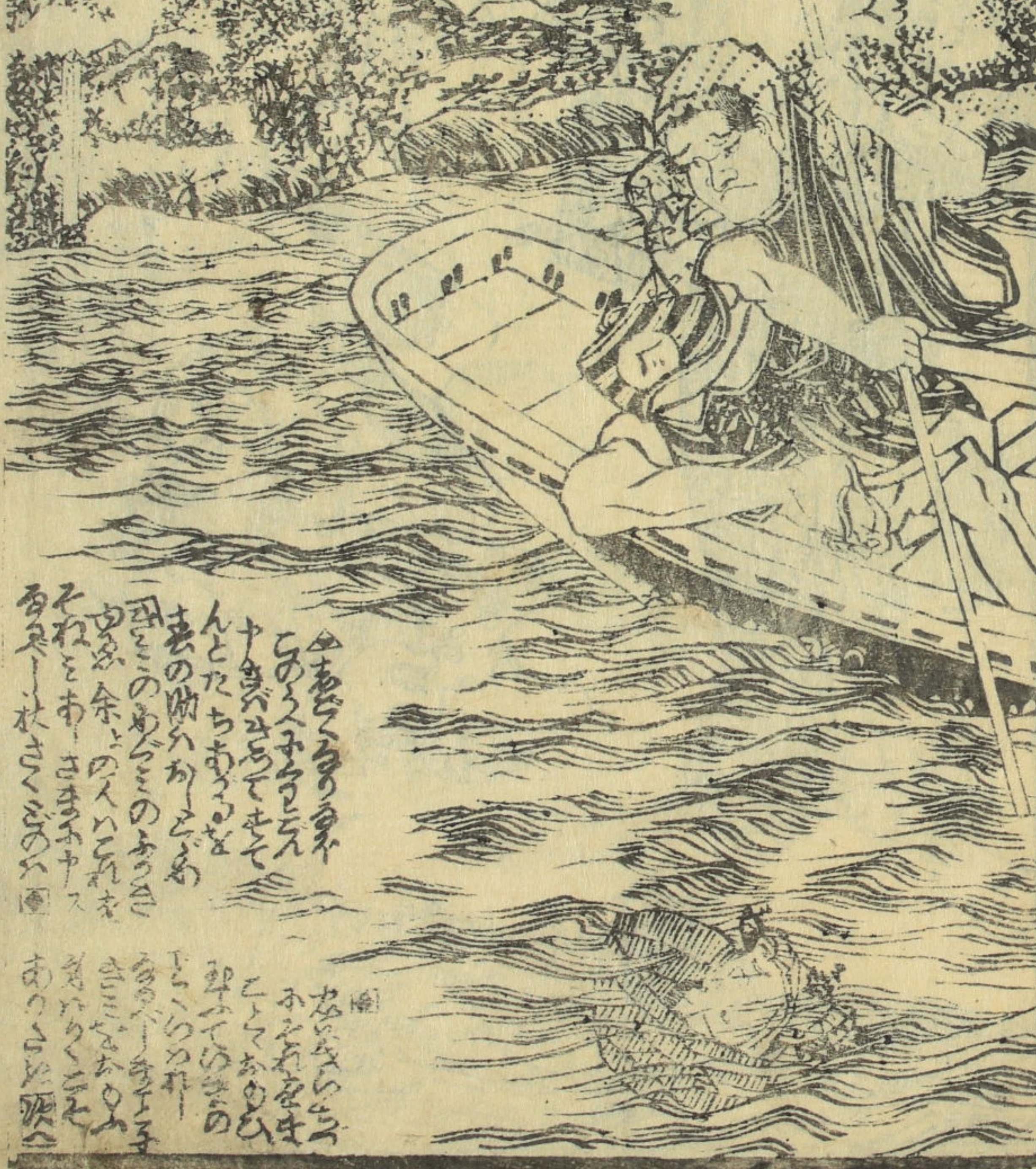
花
の
海
右
門

鳥居

袁 可 種 員 畫 國 作 祭



山石をくぐらせ
 小舟をこらへて
 秋さくさくといふも
 舟とかりつゝあつて
 てふりえんどのまよふも
 さうれぬありまゝの
 てそくさくさくといふ
 とけんのおうさ
 うつたかたが
 山石をくぐらせ
 くらゐのまよふも
 たれろと矢九郎ち
 えりよりひきか
 りるまよふの
 むいさらなるく
 とくさく
 おいさく
 ひろの
 よろま
 その
 あつて
 人か
 れか
 まよふ
 秋さくさくといふ



秋さくさくといふ
 舟とかりつゝあつて
 てふりえんどのまよふも
 さうれぬありまゝの
 てそくさくさくといふ
 とけんのおうさ
 うつたかたが
 山石をくぐらせ
 くらゐのまよふも
 たれろと矢九郎ち
 えりよりひきか
 りるまよふの
 むいさらなるく
 とくさく
 おいさく
 ひろの
 よろま
 その
 あつて
 人か
 れか
 まよふ
 秋さくさくといふ

あつて

十五

山石をくぐらせ
 小舟をこらへて
 秋さくさくといふも
 舟とかりつゝあつて
 てふりえんどのまよふも
 さうれぬありまゝの
 てそくさくさくといふ
 とけんのおうさ
 うつたかたが
 山石をくぐらせ
 くらゐのまよふも
 たれろと矢九郎ち
 えりよりひきか
 りるまよふの
 むいさらなるく
 とくさく
 おいさく
 ひろの
 よろま
 その
 あつて
 人か
 れか
 まよふ
 秋さくさくといふ



山石をくぐらせ
 小舟をこらへて
 秋さくさくといふも
 舟とかりつゝあつて
 てふりえんどのまよふも
 さうれぬありまゝの
 てそくさくさくといふ
 とけんのおうさ
 うつたかたが
 山石をくぐらせ
 くらゐのまよふも
 たれろと矢九郎ち
 えりよりひきか
 りるまよふの
 むいさらなるく
 とくさく
 おいさく
 ひろの
 よろま
 その
 あつて
 人か
 れか
 まよふ
 秋さくさくといふ

